

経営協議会の学外委員からの意見を法人運営に活用した主な取組事例

平成30年度

意見	取組事例
<p><u>30.7.19 その他の意見</u></p> <p>1. 奈良教育大学の学生には、奈良のことを知る学びを1年間ほど勉強して欲しい。</p>	<p>1-1 奈良女子大との協働による新教養科目「奈良と教育ーここはどこ？ 私は誰？ー」を令和元年度から開設している。その目標は以下の4点である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 教師として、自分が働く地域を知り、学校と地域の関係について理解する。 ② 奈良の事例を通して、日本の教育の歴史と現状、課題について自分なりの意見を持つ。 ③ 教育という視点から、奈良についての理解を深める。 ④ 自らが他ならぬ奈良の地で学んでいることの意味について、考えたり問い直して理解する。 <p>また、全15回の中には、奈良国立博物館と奈良文化財研究所を訪問し、講話を聴いたりフィールドリサーチをしたりする学習を取り入れている。</p> <p>1-2 令和元年度より、教養科目としてすでに開講しているESD関連科目を選択推奨科目とするとともに、そのうちの「ESD概論」と「ESD-SDGs基礎論」を選択必修科目として指定した。そこでは奈良や奈良の文化についても扱い、本学を卒業する全ての学生が奈良の文化を理解し、その持続発展に資する教育実践力を身に付けることを期待している。</p> <p>1-3 奈良の文化に接する科目は、ユネスコスクール推奨科目として「アジアの中の日本美術史」「ESDと世界遺産」等が開設されている。また、教育課程外での活動として、音声館における奈良のわらべうたコンサートや留学生と奈良の文化に触れるなどの活動が行われている。さらに平成30年度には、奈良工業高等専門学校・奈良女子大学の生徒学生とともに、奈良の染色を学ぶプロジェクトも実施した。</p> <p>1-4 奈良国立博物館、奈良文化財研究所からも「奈良教育大で学んだ学生は誰もが奈良を理解し、子どもたちに奈良の歴史・伝統・文化について教育できる人材として育成してほしい」との要望を受けている。今後さらに、教育課程の見直しや新規プロジェクトを立てるなどして、推進していきたい。</p>

<p>2. 奈良の魅力を伝えられる教師になってほしい。</p> <p><u>30.11.19 「科学研究費助成事業の平成 30 年度配分結果及び平成 31 年度応募、採択状況について」に関する意見</u></p> <p>3. 科学研究費助成事業においては、応募する先生としない先生とがいるが、応募率も減ってきているのであれば、応募しなかった教員は、ペナルティ化することも必要ではないか。</p> <p><u>31.3.15 「平成 31 年度計画案について」に関する意見</u></p> <p>中期目標 13 ・教育委員会や義務教育諸学校等と協力しながら、様々な分野の教員を擁する教育大学の特色を生かした地域への貢献を図る。</p> <p>4. 学生をもっと地域の中に出してきて欲しい。 スクールサポーターやボランティアだけでなく、もっと地域連携の企画に入ったり、コーディネーター研修に入って一緒に企画したりし、教育大学の強みとしていただき、是非学生の頑張りを単位取得化に繋げて欲しい。</p>	<p>2-1 上記 1-1～1-4 と同様。</p> <p>3 平成 30 年度の学内予算編成方針から、研究経費の配分については、科学研究費助成事業等の外部資金に応募した者のインセンティブを高めるため、全体の枠組みを見直している。</p> <p>具体的には、従前の基盤的研究経費の配分単価を大きく減額している。これに伴う研究経費の不足分については、科研費等外部資金の応募を予定している者には、学長裁量経費による研究プロジェクト経費・研究経費の追加要求の上限額を高く設定している。また、平成 29 年度からは、科研費等外部資金を獲得した者に、その間接経費の一部相当額を研究費として配分する割合を増加している。</p> <p>なお、科研費等外部資金の獲得実績については各教員の業績評価に反映しており、昇給や昇任等の処遇に反映しているが、科研費に研究代表者として応募し不採択となった際にも、プラスの評価ができるシステムとしている。</p> <p>更には、科研費に応募し不採択となった者に対して、その審査結果によっては、次回採択の可能性が高い研究課題として、更なるインセンティブを与える方策を検討している。</p> <p>平成 30 年度の年度計画として策定している【12-1-1 基盤的研究費変更後の科研費応募件数の増減等についての検証】を行ったところ、平成 31 年度の科研費の応募結果からは、これらの因果関係は見られなかったが、新規採択率については本学としては高い採択率となった。ただし、この結果だけで判断することは時期尚早と思われるため、引き続き注視していきたい。</p> <p>4-1 学生の地域での活動を取り入れた科目としては、以下の科目を実施している。 これらの科目を含む、地域での活動に対する学生の参加意欲をさらに高める取組みを、連携校等と協力し強化する。</p> <p>① 「へき地学校実習」(教職大学院)(平成29年度～) 十津川サマースクールの実施により、へき地教育の現状に学ぶとともに、小学生との学習交流をとおして児童に学ぶ喜びや多くの人と接する楽しさを伝え、院生自身が視野を広げ教員としての専門性・実践力を高めることを目的とする。</p>
--	--

<p>5. 奈良市教育委員会と地域との間に大学が入ることはできないだろうか。できれば学長ではなくもっと担当の先生方に協力してほしい。</p> <p>6. 奈良は災害が起きにくいとか防災意識が低い地域だと思うが、学校というところは防災意識を持っていないといけないところである。学校単位での防災の取り組み方、対応の仕方によって、被害の出方に違いが大きく出てくるため、学生には危機管理意識を持っていただきたい。</p>	<p>② 「山間地教育入門」（学部）（平成30年度～） 平成30年3月に奈良県へき地教育振興協議会及び奈良県教育委員会との3者協定を締結し、奈良県へき地教育振興協議会に所属する村教育委員会及び奈良県教育委員会の協力のもと、平成30年度に自由科目として新設した。1泊2日のスタディツアーとその事前・事後学習を通じて、奈良県南部の山間地域とそこでの「へき地教育」の実状を学び、持続可能な社会のあり方を考える。</p> <p>③ 「奈良と教育ーここはどこ？ 私は誰？ー」（学部）（平成31（令和元）～） 奈良女子大学との法人統合の柱となる「教養教育の充実・強化」に向け、その試行として、平成31年度前期に、両学学生が共同で学ぶ教養科目「奈良と教育ーここはどこ？ 私は誰？ー」を新設・実施した。本科目は、奈良で学ぶ両学学生が「奈良で学ぶからこそ身につけたい教養」として、文化・歴史・社会・教育の面から奈良の特質や本質を協働的学習によって考え、理解を図るものである。また、本シラバスには奈良国立博物館、奈良文化財研究所、明日香村等、地域との連携を組み入れて構成している。</p> <p>4-2 奈良県教育委員会と連携して「山間地教育入門」を開設している。その目標は次の2点である。</p> <p>① 奈良県南部の山間地域の教育をはじめとする「へき地教育」の課題を理解し、可能性を考え、他者に説明できるようにする。</p> <p>② 学校訪問や現職教員との意見交換を通じて山間地域の学校の実情にふれ、山間地域での教育活動に対する参加・参画意欲を高める。</p> <p>5 地域・教育連携室会議を月1回開催し、奈良市教育委員会の方にも室員として参加いただいている。この室において、奈良市のニーズ等を伺い、課題解決に協力できる本学教員を紹介している。</p> <p>6-1 平成30年度より教職員・学生が協働する防災訓練プロジェクトチームを結成し、学生の防災意識を高めるための活動に取り組んでいる。 平成31年度は、4月の新入生オリエンテーションでの防災教育、7月のナラ・シェイクアウトへの参加、12月の総合防災訓練（情報伝達訓練・避難誘導訓練）など様々な活動を通して、学生に防災意識を定着させることを目指している。</p>
--	--

総合防災訓練では、防災訓練プロジェクトチームに参画している学生委員の意見を取り入れ、学生が当事者意識を持って参加できるような体験型の訓練を行う予定である。

6-2 教養科目に「まちの地理情報の収集と防災活用」を奈良市の防災というテーマで、地理情報の収集・分析およびそれに基づく地域への提案を考えることで、地理的な問題解決力を目指すとともに、将来教員として防災・防犯の観点から遊学路や集合場所を検討したり、それらを教育に活用できるようになることを目指した授業を開設している。